〔巻頭言〕

本誌の発展的解消に思う

藤 田 和 弘

(リハビリテーションコース代表)

平成元年度に設立された本リハビリテーションコースは、今年度で10周年を迎えた。本誌の発行は8巻目になる。設立まもない時期は、諸般の事情から研究誌の発行が難しく、2回休刊したからである。第1巻から第8巻までの本誌を比較してみると、量的にも質的にも発展してきているというのが実感である。

まず、総頁数からみると、第1巻の50頁弱から徐々に増加し、第7巻からは100頁を越えるまでになった。次に、掲載内容では、原著、事例、短報、資料、展望、トレンド、その他に分かれているが、巻を重ねるにつれ原著論文の数が増加し、特に本号は最も多く6編にのぼっている。本誌は、大学の紀要といった性質を有するが、レフリーが内部関係者とはいえ査読におけるチェックには厳しいものがあり、そうした中での原著論文の増加は質的な向上の反映の一つと考えられよう。事例、資料の数にはほとんど変化はみられず短報の数はいく分減少している。さらに、トレンドと展望では、リハビリテーションの研究や実践における最新の情報や動向を提供し、その他にも本コースの修士論文概要や本コース主催の公開講演会の要約などを掲載し、貴重な情報提供の役割を果たしてきたように思う。しかし、研究分野別にみると、本コースの教官や院生の専門性との関係もあるためか、教育、心理、医学(コメディカルを含む)リハビリテーションに関する論文が多く、職業、社会リハビリテーション、障害福祉などの分野の研究が少ない傾向がうかがわれる。また、本コースの特徴を反映して、実践研究が圧倒的に多いのはよしとしても、多専門間にまたがるリエゾンや連携のあり方に関する研究、システム研究などは皆無に近い状態である。

本誌の創刊に際していろいろな議論がなされたことを覚えている。その中の一つは、大学の紀要といったクローズドな研究誌では限界があるという意見である。さらなる発展を期するなら、本学以外のリハビリテーションの専門家に開かれた研究誌にすべきである。いま、その夢が実現しつつある。「筑波大学リハビリテーション研究」という名称での発行は第8巻をもって最後になるであろうが、それは終焉を意味しない。本誌は、我々の理想とするリハビリテーション研究のさらなる発展の礎として発展的に解消し、文字通り末広がりとなるはずである。